

研磨屋稼業はつらいよ♪

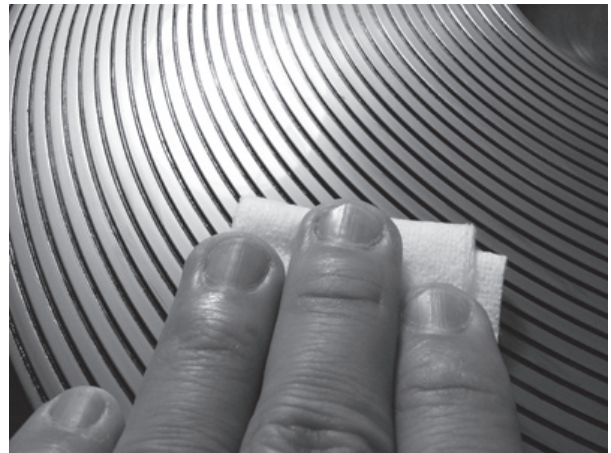
精密研磨稼業を展開中♪材料との「格闘」や日々、感じたことを紹介します。
研磨屋店主：カノン (canon)

第12回 最終回「宿題は自分で探させるべき」の巻

日常の業務に流されるばかりで、誰かから仕事を与えられなければ自分はリストラ対象の窓際族だ・・・なんてボヤキを耳にしたことがあります。・・・でも、何か違うような気がするんですけど。学校から指定された宿題を夏休み中に終わらせるのは早いですが、自由研究は何をやっているのか自分で決められない。なんだかそれと似てるような気がします。地味に見える作業から課題発掘をせず、やらなくちゃいけない事を遠ざけている日常を平気で過ごせる人は「現場」の意味を見失っているように感じます。「現場は宝の山だ」って言いますもんね～♪ 定常作業に慣れてくると「ここをこうすれば早いんじゃないか」とか「こうすれば精度が良くなるんじゃないか」というアイデアが湧くことでしょう。それがすなわち”宿題(テーマ)”になります。思うような結果が得られるまで粘り強く、ひとつのテーマに対して幾つもの方向から切り込むことで様々な発見、ヒント、採るべき方向性が見えてくるはずです。このような活動を「それは製造の仕事ではない」とか「開発設計の仕事だ」と縦割りにしてしまう職場もまだまだ多いと言えましょう。だけど、現場経験の無い人間にそもそも宿題を選ばせることも、ましてや、筋道を立てて解いていく作業は非常に難しいものです。どのような難題でも人によって着眼点の違いがあります。どこから切り込むかが加工屋の特長を引き出し、得意技術となって競争力に昇華していきます。

昔、師匠に「お前はこれから何を極めたいんだ？」と突然言われて「平面度を極めたい」と答えた記憶があります。現状はどうなったかという、「粗さ」にかなりのパワーを割いて今に至るのですが「難しい材料の平滑化」というテーマで平面度と平滑性を両立させるような加工を目指しています。製造現場では規模が大きくなるとどうしても「作業効率向上」という”大義名分”を持ち出して先人が苦勞して習得した技能や技術、経験から作り出した加工治具などを新人に丸投げして与えてしまうことが多く、理由を知らない機械要員ばかりが増えて、宿題を自分で探せない作業者が育つ結果、死んだ技術だけが残ります。生きた技術は時代のトレンドや仕様に依じて柔軟に変化し、対応できるものではないでしょうか。しかし、そういう作業者に育て上げたのは我々のような立場にいる先輩です。丸投げではなく、考えさせる習慣を身に付けるよう指導する責任があることは間違いないでしょう。新人にとってすごく意地悪な先輩であっても後々、感謝されるのかもしれないですね。自分で自分のテーマを探して自分なりに

結果を出せる「考える」作業者を育てるのに、アカデミックな話を押し付けて放っておくだけでは後継者は育ちません。自分が熟練工になれても「教える才能」もあるとは限らないのです。考える作業者を育てるという活動は機械の取扱説明書と作業指示書を読ませるだけで完成することはありません。自立した作業者を育成するためには私たち、教える側も現場に立ち続ける必要があるでしょう。作業者が問題を自分で見つけられるようにちょっとだけ後押ししてやれば良いのです。ためにならない苦勞はさせずに、益になる苦勞はどんどんさせて大いに悩んでもらいましょ。



私たちは問題意識を常に持って作業するとき研磨材、ポリッシャ、治具、加工装置、加工動作について「なぜ？」を自分の中で連呼し続けています。若い作業者は経験を重ねることでスタンダードな加工条件については納得できるようになるものですが、先輩にできて自分にできない「理由」、或いは、まったく同じ作業を並んでやっていると仕上がりに差が出る「理由」について深く考えるようになると自分にテーマを課して「もっといいモノが作りたい、上手になりたい」という一種のモチベーションが生まれます。これが動機付けであり、作業のあるべき姿勢だと個人的に考えています。皆さんの通常作業の中にもヒントが沢山あるはずですから、是非、自分の宿題を探してみてください。たーのしーよー♪

研磨屋稼業はつらいよ♪ (学会誌Ver) *Fin*

(web版はこちらから)

<http://canon.air-nifty.com/cmp>